

心理アセスメントにおける黒- 色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢 (1)

名島 潤慈

Black-Color Tree Test, Self-Portrait Drawings, Fishing of Wild Pearl Oysters and
Dreams in Psychological Assessment (1)

NAJIMA Junji

(Received December 17, 2003)

ABSTRACT

For many clinical psychologists, how to use the projective techniques in psychological assessment is a particularly important matter. In this article the author has discussed the significance of projective techniques, focusing on the Black-Color Tree Test and Self-Portrait drawings that are individually administered personality tests.

Key words: Black-Color Tree Test, Self-Portrait Drawings

I 本稿のねらい

インテイク面接において筆者は、おおむね「黒-色彩バウムテスト」「自画像(セルフポートレート)」「真珠採り」の3つを共通して用いている(名島, 2000を参照)。最初の2つは描画形式、3つ目は質問形式である。

「黒-色彩バウムテスト」の最初のアイデアはFodorとKendel(1966)によるが、筆者は彼らの論文を読んだ後、1973年からその追試・発展の形で黒-色彩バウムテストを行ってきた。もともと、FodorとKendelは赤・緑・黄・青・茶・紫色の6色を用いたが、筆者はこれら6色以外に黒・橙・黄緑・桃・水・肌色の合計12色を用いている。ちなみに、岩井は16色のクレパスを用いているが、これは色彩バウムだけの1枚法である(岩井編著, 1981)。また、水口(2002)は末期ガン患者の緩和ケア病棟において12色のクレヨンを用いているが、<1本の木を描いて下さい>と<実のなる木を描いて下さい>という2種類のテストを行っている。

次の「自画像」は、従来からいろいろな人たちによって用いられているものである。クライアントの全身像(a full-length self-portrait)を描いてもらう。もともと、心理テストの範疇では、<人を描いて下さい>という「人物画テスト」が主流であり、自画像テストといった言い方はこれまで目にしたことがない。

最後の「真珠採り」は筆者が考案したものであるが、その狙いは、クライアントにとって命を預けるほどの「重要な人物」が誰かを探索することである。

筆者の場合言うまでもなく、クライアントによっては、これら3つ以外にロールシャッ

ハテストや TAT を用いている。また、描画のための時間がほとんど取れないような場合には(バウムテストと自画像はそれぞれ早ければ数分、長いと30分くらいずつかかる)、「3つの願い」(Kanner, 1957)・「転生願望法」(山中, 1978)・「真珠採り」を適宜組み合わせたりする。これらの質問形式は3つすべてを一度にやっても、かかる時間はほんの数分である。適用対象は、幼児から成人まで可能である。

以下、本稿では紙数の関係で、黒-色彩バウムテストと自画像の留意点について述べてみたい。

Ⅱ 黒-色彩バウムテスト

黒-色彩バウムテストは A4 サイズの白紙に縦に、最初は HB 鉛筆を用いて実のなる木の絵を描いてもらい、次に12色の色鉛筆を用いて別の A4 サイズの白紙に縦に実のなる木の絵を描いてもらうものである。色彩バウムの場合には、色は何色使っても、どんな色でもよい。黒-色彩バウムテストの解釈は、黒色バウムと色彩バウムとの比較、色彩バウムの色の使用本数、色名などの観点からなされる(名島, 1996, 1998, 1999; 名島・増田ら, 1974; 増田・名島, 1975; 名島ら, 2001)。

黒-色彩バウムテストの実施上・解釈上の留意点は以下である。

(1) 黒色バウムと色彩バウムはそれぞれ、「形態分析」(Koch, 1952)、「運筆の動態分析」(国吉, 1970)、「樹冠と幹の高さの比率」(山下, 1982; 一谷ら, 1986)などを行う。

(2) 心的外傷体験の年齢を推定する方法としては Wittgenstein 指数がよく知られているが(Koch, 1980を参照)、少し煩雑なので、実際的には Buck (1948) や中尾ら (1974) の簡便法で十分であるように思える。

(3) 被検者の脳裏を占有している観念(欲求)ないしイメージがそのままバウムに出現することがある。例えば、放火を繰り返す中学生がバウムの樹冠を炎の形にしたり(Regula Kochら編, 1980)、男性性器に強い関心を有している女性がペニスの形の木を描いたり(Buck, 1948)、女性性器に強い関心を抱いている青年が木の幹に女性性器の形状をした節穴を描いたりする(Bolander, 1977)。このような場合には、被検者が描いたものについて、バウムテスト終了後に被検者と話し合っ確認しておくことが大切となる。ちなみに、被検者の性別は重要である。例えば被検者が勃起していないペニスの枝を描いた場合、被検者が男性ならインポテンツやその恐れを意味する可能性があるし、女性ならパートナーの性行為についての不快な経験を意味する可能性がある(Bolander, 1977)。

被検者の年齢が若い場合には、母親に確認してみるとよい。例えば、ある小学校2年生女子(主訴は登校時間帯の腹痛)は幹の先端や枝の先が刀のように尖っているバウムを描いた。筆者が母親に、「娘さんは最近、攻撃性が少し増しているようですね」ときくと、母親は即座に、「ええ、最近ひどい悪態をつくようになりました」と答えた。

バウムそれ自体は普通に近いものでも、バウムのどこかに隠喩的な形で被検者の占有観念ないし欲求が投映されていることもある。例えば、離婚家庭に育ったある10代の非行少年は「太い幹・開放枝・空白の幹・葉なし・たくさんの大きいリンゴ」という黒色バウムを描いたが、次の色彩バウムでは、「太い幹(茶)・開放枝(茶)・葉(緑と黄緑)・たくさんの大きいミカン(黄)」を描いた。色彩バウムは黒色バウムの約2倍の大きさであった。被検者は検査者(野口哲也氏)から質問されると、「黒色のは寂しい感じがするのでカラーの木の方がいい。自分は黒色のリンゴの木だと思うので、カラーのミカンの木になりた

い。カラーの木はまた、家族が仲良くしているような印象がある。幹が父なら葉は母、実は自分」と答えた。

(4) 黒色バウムと色彩バウムを比較してみる。比較のポイントは、色彩が導入されたことによって、①バウムの大きさ（バウム空間）はどのように変化したか、②バウムのバランスはどのように変化したか、③バウムの内容の豊かさはどのように変化したか、である。例えば、③の内容の豊かさについて言えば、黒色バウムは2線枝なのに色彩バウムが1線枝（退行所見）となった場合、この被検者は他者との感情的・情緒的関わりを有すると幼児的な考え方や行動を取りやすいといったことが推測される。一般的に言って、黒色バウムに比べて色彩バウムのバウム空間が増大したり、バウムのバランスがよくなったり、バウムの内容が豊かになったりすることは、他者からの感情的・情緒的刺激に対する感受性（反応性）がよいことを示唆している。

ちなみに、黒-色彩バウムテストは最初に黒色バウム、次に色彩バウムという順にバウムを描いてもらうが、この順序が色彩バウムの産出に何らかの影響を与えるのではないかという疑問が生じよう。この点はしかし、順序を逆にしても描いてもらっても、バウムの空間・バランス・豊かさに関して2群間（大学生を対象）に特に有意差はない（村田ら、2001）。

2枚のバウムを比較できるのは、黒-色彩バウムテストの最大の利点である。今日に至るまで広く行われている鉛筆1本による黒色バウム1枚法では限界がある。実際筆者は、黒色バウムでひどく貧弱な木を描いたクライアントが豊かな色彩バウムを描く例を数多く体験している。黒色バウムのみでの判定では、クライアントのパーソナリティの評価・査定を見誤る可能性が高くなろう。

(5) 黒-色彩バウムのもう一つの利点は、色彩バウムそれ自体である。セラピストはまず、色彩バウムがどのような類型であるかに注意してみる。色彩バウムの各類型の特徴とその意味については、表1を参照されたい。

表1 色彩バウムの類型名と特徴と意味（名島，1999を修正）

類 型 名	特 徴	意 味
基本型 (basic type)	おおむね4色ないし5色の自然色が使用されている。	自然な感受性を表す。
精緻型 (elabolate type)	基本型をより精緻にしたもの。数多くの色彩を用いて微妙な色合いが表現されている。形態水準も良好。	細やかで繊細な感受性。成熟した情緒。
逸脱型 (deviant type)	紫の葉、青やピンクの幹といった具合に自然から逸脱した色彩が使用されている。自然色と逸脱色の両方が用いられている場合、逸脱色のみの場合など、いろいろ。逸脱色が一部のみの場合には判定は微妙。	現実吟味力の障害があり、思考障害（妄想を含む）の可能性が強い。
混乱型 (confusional type)	逸脱型の極端なもので、数多くの色彩が乱雑かつ無統制的に使用されている。形態水準はきわめて不良。まれにしか生じない。	感情の無統制状態。そう病・そう状態が典型的。
収縮型 (constrictive type)	1色ないし2色の自然色が使用されている*。つまり、色彩の使用が極端に制限されている。	感情の抑制。うつ病・うつ状態が典型的。
回避型 (avoidant type)	12色の色鉛筆のなかの黒色だけが使用されている。これは、鉛筆による黒色バウムと同じになる。まれにしか生じない。	感情の回避。他者との感情的・情緒的な関わりを回避・忌避する傾向を意味する。

* 1色ないし2色が逸脱色の場合には、そのバウムは逸脱型となる。

(6) 色彩バウムに使用される色の数に注目する。健常者の場合には、4色ないし5色程度である(名島, 1999)。より具体的には、10歳代後半が平均4.9色、20歳代前半が4.7色、20歳代後半が4.3色、30歳代が4.9色、40歳代が4.5色、50歳代が4.6色である。60歳代以降のデータはまだ出していないが、3色ないし4色程度だと思われる。ちなみに、筆者の手元にある最高齢は86歳の男性の色彩バウムである(坪崎, 2003)。茶・赤・黄・水・青・紫の6色が使用されたミカンの木である。ごく軽度の抑うつ(BDIの得点が13)があるためか、幹の根本のほうは紫色となっている。

子どもの場合、6歳児が平均4.3色、7歳児が平均4.3色、8歳児が平均4.5色、9歳児が平均6.1色、10歳児が平均6.6色、11歳児が平均6.0色、12歳児が平均5.1色、13歳児が平均4.3色、14歳児が平均4.6色、15歳児が平均5.1色である(今村, 1998)。ここで9歳から11歳までの色の使用数が大きくなっているのは大変興味深い。

(7) 色の数と抑うつ度とは必ずしも対応しないことがあるので注意する。以前に吟味したことがあるが(名島, 1998)、ある大学4年生男子(対人緊張)に「ひすい技法」を適用した事例では、面接中に合計6回の黒-色彩バウムテストを行った。これらのうち、SDSが最高(46点)であったときの色彩バウムには、茶・赤・緑という3色の自然色が使用されていた。(ひすい技法とは海の水のイメージを用いるリラクゼーション技法で、ストレスによる頑固な身体症状に効果がある。クライアントはかすかに青みがかった透明な波をイメージのなかで錬金術のように作り上げ、その波を体のなかに徐々に取り入れていく。この技法の詳細については名島, 2002を参照されたい。)別の30代の男性(意欲喪失)はSDSが63点という高得点であったが、色彩バウムでは、緑・黄緑・赤・茶という4色の自然色が使用されていた。これらの場合、バウムの形態的特徴として、黒色バウムも色彩バウムも共に下向きの枝が見られた。このように、色彩よりも形態のほうに抑うつが反映されることがあるので注意する。また、クライアントによれば、バウムテストよりも自画像のほうに反映されることがある(黒色の輪郭線や寒色の使用)。

(8) バウムの特殊形態としては、「メビウスの木」と「星型バウム」がある。

メビウスの木は精神科医の山中(1976, 1995)が発見したもので、「漏斗状幹上開(funnel shaped apical phenomenon)」を示すバウムのなかに見られる特殊形である。具体的には、本来なら幹の輪郭線であるものが上方に行くに従って1本の枝と化すという奇妙なバウムである。メビウスの木は「メビウスの帯現象(Maebius' stripe phenomenon)」とも呼ばれる。主として統合失調症(精神分裂病)・非定型精神病に見られるが、その他、バセドウ病者・白血病者・心身症者にも時に見られるという(山中, 2003)。メビウスの木の意味としては、最初は「自我境界が破れて、内界と外界が勝手に連絡してしまったという状態」(山中, 1976)、後には「基底断層(basic fault)の存在」(山中, 1999)などが挙げられている。

岸本(2002)は幹先端処理から見たバウムを開放型と閉鎖型に分けているが、開放型のバウムのなかの完全開放型(ならびに閉鎖不全型の一部)がメビウスの木に相当する。ちなみに、原田(1998)の資料によれば、統合失調症(精神分裂病)におけるメビウスの木の出現率は、黒色バウムで14%、色彩バウムで8%である。黒色バウムと色彩バウムの2枚法の場合、最初の黒色バウムがメビウスの木であったときには、次の色彩バウムがメビウスの木であるかどうかは临床上重要となる。

一方、星形バウムは、筆者が病院臨床場面における数多くのバウムを見ていて偶然見つ

けたものである。星形バウムといっても、枝や樹冠が星形をしているのではなくて、もっぱらバウムの実ないし葉が星の形(☆)をしたものである。大きい星数個の場合もあるし、小さな星がたくさん枝になっている場合もある。言うまでもなく、木の背景に星が輝いているようなものとか、戯画的・装飾的な描き方(例えばクリスマスツリーに付けられた星)をしたもの、カエデを描いたもの(カエデはもちろん実のなる木ではないので筆者自身は経験していないが)などはここには含めない。星形バウムは主として統合失調症(精神分裂病)に見られるが、出現頻度は稀である。ちなみに、後年 Bolander (1977) の書いたバウムテストの本を読んでいて、ごく簡単ではあるが、彼女がバウムにおける星に言及していることを知った。彼女によると、☆のようにはっきりした形の星は大きな危機が問題になっているときに見られるという。

筆者が経験した星形バウムの最初の例は名島・増田(1993)に載せておいたが、入院中のある病者が描いたものである。「何の木ということはない」と彼が言う色彩バウムで、葉の緑色と幹・枝の茶色の2色のみ。空白の幹。幹の基線は斜め。幹の先端部は大きく左右に裂けている。3枚の葉はそれぞれ大きな星型であり、現実からの距離の遠さをうかがわせる。彼がこのバウムを描いたのは、地球が爆発するような感じがして暴れまわったり、タバコの火を自分の左手の甲に押しつけるといった状態が収まって、しばらく後のことであった。しかし、このバウムから2か月後に描いたバウム「いちじく」は、通常の形をした緑色の葉、赤と黄色の実、茶色の幹と枝で、形態も普通の木の形に近いものであった。この2回目のバウムからは外界からの情緒刺激に対する応答性が増大していることがうかがえるが、実際、そのころの彼は病棟内では落ち着きを増し、他の患者さんとの交流も見られるようになっていた。

(9) バウムテストでは検査者-被検者関係が影響することがあるので注意する。大学生を対象とした藤中(1996)の研究では、顕在性不安が高い被検者は検査者との人間関係の影響を受けやすいという結果が出ている。また、一谷ら(1985)はバウムテストの「2枚実施法」(被検者にまず木の絵をかいてもらい、それから受容的・支持的雰囲気の中かで他のテストや面接を行った後、最後にもう一度木の絵をかいてもらうもの)を行っているが、一般群よりも臨床群(非行や不登校)においてバウム項目の不一致率が高くなっている。一谷らは、「2枚目では被検者の真の姿が投影的に表現される」と結論づけている。

一般的に言って、被検者の年齢が低くなればなるほど検査者との人間関係の影響を受けやすくなる。例えば、検査者が時間に迫られるあまりに被検者をせきたてるような感じで描画させるときなど、被検者の緊張や不安が高まって、それがバウムに影響してくることがある。浅原(2001)の資料に基づく、ある活発で明るい女の子(5歳、幼稚園年長組)は、母親に無理にせき立てられるような雰囲気の中かでしぶしぶ黒色バウムと色彩バウムを描いた。色彩バウムは黒色バウムよりもバウム空間が縮小し、しかも全体的に縮こまった、茶色1色のみリンゴの木であった。しかしその5日後、幼稚園の遠足でこれから動物園の見学に行くという日の朝、わくわくとした、ゆったりした朝の雰囲気の中かで女の子はもう一度色彩バウムのみを描いたが、それは、大きくのびのびとした、黄・黄緑・茶・黒・赤・橙・紫・桃色の8色のカラフルなリンゴの木であった。根も張り、幹の太さも最初のバウムの約3倍の太さであった。

もちろんこれは少し極端な例かもしれないが、被検者が年少児になればなるほど検査者-被検者関係に気を配る必要がある。被検者の表情や動作から緊張や不安がうかがえたら、

それをゆっくりと解きほぐしてからバウムを施行するとよい。

(10) 最後に、セルフエスティームとバウムとの関係について触れておきたい。遠藤ら(1974)が作成したSE-I形式をセルフエスティーム尺度として使用した村田(2002)の研究によれば、次のようなことが言える。①セルフエスティームの高い人、なかでも他者評価への過敏性が低くて社会場面での不安が低い人はセルフエスティームの低い人に比べて2枚のバウムで異なる木を描くが、セルフエスティームの低い人は同じ種類の木を描く(セルフエスティームの高い人は、能動性が高いため好奇心が強くて遊び心がある)。②セルフエスティームの高い人は黒・色彩バウム共にバウム空間が大きく、用紙の右半分を多く使用する(セルフエスティームの高い人は内的生活空間が大きく、肯定的自己評価が高い)。③セルフエスティームの高い人は黒・色彩バウム共に樹冠の高さと幹の太さが大きい。

従来からバウムテストと言え、鉛筆による黒色バウムであったし、今もそうである。しかし、黒色バウムのみから被験者の感情・情動面のあり方を推測するのは限界があろう。色彩と感情との親近性を考慮すると、黒色バウムと色彩バウムの2枚法が妥当であろう。特に、黒色バウムと色彩バウムを比較検討することは、従来の黒色バウムのみのバウムテストとは異なるところである。

Ⅲ 自画像

よく知られているように、発達的に見た場合、描画には一定の順序がある。最初は1歳前後から始まるなぐりがきで、点・短線・波形、さらには螺旋形や渦巻きが描かれる。そして、描かれた描線は命名される。山形(1989)によれば、女兒のMは1歳7か月23日のとき、最初は鉛筆を強くうち下ろして点をかいていたが、やがて円状の渦巻き線を描いて「ニイチャン」(Mの兄のこと)と命名したという。

なぐりがきではその後、円が独立しはじめ、それから円形の頭部に足がつけられる。この場合、手は頭部から横に出るが、手がないこともある。胴体のないこの奇妙な人物像は伝統的に、「頭足人(tadpoles, tadpole figure)」とか「頭足類(cephalopods)」と呼ばれている。この頭足人の出現年齢は個人差があり、長坂(1981)によれば2歳半から3歳半、Cox(1992)によれば2歳10か月から4歳10か月である。

人物像はその後、4歳前半には頭に髪の毛が付き、4歳後半では比較的性差がはっきりとし、5歳前半には首が描かれ、ほとんどの子は胴体を描く(空井・清藤, 2001)。実際の人間らしい形が描けるのは、だいたい小学校4年生頃からである。ちなみに日比(1994)によれば、頭足人には見られなかった「胴体」が出現するのは、2歳児までは0%であるが、3歳男子は38.9%、3歳女子は61.9%、4歳男子は75.0%、4歳女子は80.0%、5歳男子は96.9%、5歳女子は96.9%である。

ところで、人物画テストのなかでも自分自身を描かせる自画像について述べると、まずアートセラピストのDenny(1972)は、①“Phenomenal, Ideal, and Real Self-Portraits”、②“Self-Portrait with Time Limits”、③“Draw Yourself as an Animal”という3つのやり方を紹介している。①は「自分が描きたいと思う人」「理想的な自分」「現在の自分」という3つの人物を描かせるもの、②は1分間という時間制限のもとに自分の全身像を描かせるもの、③は自分を最も好きな動物にたとえて描かせるものである。ちなみに、①の「自分が描きたいと思う人」は、Dennyによれば、Machoverのやり方にし

たがった場合と同じものが得られるという。また、③では、自分が最もなりたいと思う動物、ないし最もなりたくないと思う動物を描かせることもある。

「家族画テスト」(Reznikoff & Reznikoff, 1956; 深田, 1958)・「動的家族画法」(Burns & Kaufman, 1970, 1972; 加藤, 1986)・「動的学校画」(Knoff & Prout, 1985) などでは、自分のみでなく家族や教師なども描かれる。「動的自己イメージ画」(Murayama, 2001) は自分だけであるが、「好きなことをやっている自分」と「やらなければならない義務だと思っていることをやっている自分」とを描いてもらう。「雨中人物画」では、<雨のなかの私>を描かせる(澤柳ら, 1989; 杉野, 1995)。(Hammer, 1967と石川, 1985では<雨のなかの1人の人物>を描かせた。)森谷(1989, 1990)の「九分割統合絵画法」では、1枚の画用紙をマジックインクで9つに分割した枠のなかに「私という言葉から思い浮かぶイメージを思い浮かぶままに」被検者に描かせている。

その他、臨床事例的には、分裂病者の自画像の研究(牛島・佐藤, 1973; 山内, 1973; 高江洲, 1975)や非行少年の自画像の研究(入江, 1986)などがある。なお、井上・水田(1998)は、1人の単純型分裂病者が描いた自画像を、彼が描いた家族画や樹木画とともに吟味している。彼の自画像は「未来の自分」「殺された自分」であり、その描画内容は大変特異なものであった。また、酒木(1999)は自閉症の事例研究のなかで、「色枠づけ法と人物画」を行っている。これは、例えば<お母さんは何色ですか?>「赤です」<S男君は何色ですか?>「紫です」といった具合に問答し、画用紙にそれぞれの色を半分ずつ用いて横長の長方形の枠をかき、その枠のなかに母の人物画と自分自身の自画像を描いてもらい、さらに、「ぼくとお母さん」というテーマで作文を書いてもらう、というものである。

実験的には桜井が中井久夫の考案した枠づけ法(fence technique)を用いて枠づけされた画用紙のなかに自画像を描かせ、自画像と有能感との関係を見ている。その結果、幼稚園児の場合には、自画像の大きさと運動に関する有能感との間に逆Vの字の関係が見られた(桜井, 1984)。また、小学校6年生の場合には、自画像の頭の面積と自己価値との間に逆Vの字の関係が見られたという(桜井・杉原, 1986)。

ところで、筆者自身はまず鉛筆と色鉛筆(12色)で黒-色彩バウムテストを描いてもらった後、同じ12色の色鉛筆を用いて自画像を描いてもらうようにしている。そのさいの指示は、<ここにある色鉛筆を使って、今度はあなた自身の全身を描いて下さい。色は何色使っても、どんな色でもかまいません>である。用紙は黒-色彩バウムテストのときと同様、A4サイズの白紙であり、縦長にして描いてもらう。

実施上・解釈上の留意点としては以下である。

(1) 描かれた自画像の大きさ、身体の各部の大きさやバランスに留意する。例えば、ある男子小学生(粗暴な行為)の自画像はいかり肩で、かつ右手の握り拳は頭部と同じくらいの大きさであった(左手の先は小さく、5本の指が普通に開かれていた)。

自画像の描線にも留意する。描線は、連続線か不連続線か、強圧か弱圧か、潤筆か渴筆かといった点が重要となる。例えば市販の薬物で自殺を試みたある男子高校生は病院での胃洗浄の4日後に自画像を描いたが、それは体の輪郭線(黒色)のみで、しかも、線はとぎれとぎれであった。特に足首から先はきわめて弱圧の線で、一見すると足下が見えかかっているような印象を受けるものであった。

(2) 色彩については、まず色の使い方に注意する。明るい色か暗い色か、暖色か寒色か、

少色か多色か。時には、12色の色鉛筆のなかの黒1色のみで自画像を描くクライアントもいる。このような場合、体の外側の輪郭線くらいで、衣服などは描かれないことが多い。抑うつ状態ないし同一性の拡散状態にあるクライアントに多い。

色の濃度にも注意する。例えば、過去に母親からのひどい虐待や同級生からのいじめを受けたある女子中学1年生の自画像は、頭部と胴体と足がそれぞればらばらに切り離されているように見えるものであった。それは彼女が首の輪郭線と脚部の輪郭線とを肌色でごく薄く描いており、そのため、顔と上半身の制服、スカートとブーツとの間が切り離されているように見えるものであった。制服・スカート・ブーツはすべて、くっきりとした黒の輪郭線で描かれていた（髪と目と眉は紫色であった）。

(3) 身体各部の特徴に留意する。そのさい、Richman (1986) の評価表は大いに参考となる（表2を参照）。このRichmanのやり方は3枚法で、2Bの鉛筆で白紙にまず人の絵を描いてもらい、次に反対の性の人物を描いてもらい、最後に自画像を描いてもらうというものである。

表2 人物描画テストの評価の概念 (Richman, 1986)

大きさ

- a. 平均的：一般的な絵の大きさは画面のおよそ3分の2である。あまり小さ過ぎたり、大き過ぎたりする絵は自己概念や自尊心の障害が存在することを示唆している。
- b. 小さい：
 1. 自分は取るに足らない、気分が沈んでいると感じている。
 2. 気づかれぬようにしよう、避けようとしている。（これはそれほど多くない。）
- c. 大きい：
 1. 自信や能力。
 2. 不全感の代償。
 3. 肥大あるいは誇大的な自己像。
 4. 他の対象を描く余地のないほど自己愛が過剰。
- d. 同じ人物がある時は小さく、またある時には大きく描く：循環気質あるいは躁うつ病の傾向。

位置

- a. 画面の中央：世界に関わることに對して興味がある。
- b. 上部：気分が高揚している。
- c. 下部：気分が沈んでいる。
- d. 左寄り：引きこもりがち。
- e. 右寄り：自分が関わった責任をとることがないように警戒している。
- f. 左上部に小さな像：抑うつ的で引きこもりがち。
- g. 左寄りで大きな像：精神分裂的な引きこもり。
- h. 中央上部の小さな像：抑うつ的であるが、それと必死に戦っている（特に、人物像が微笑んでいるような場合）。

線の性質

- a. しっかりと滑らかか、直線的：感情的には直接的で受入れやすい。通常、感情面での不安定さや、ヒステリー性格を伴う。
- b. スケッチ風、返し縫い風：知性化へのためらい、疑い、または強迫的。
- c. aとbの組み合わせ：複雑な防衛的な性格構造。（aもbもcの特徴も必ずしも、精神病的あるいは心理的な重要性はない。）（筆圧はもう一つの指標で、精神的な緊張やエネルギー水準の概略を示している。）
- d. 太い線：自己主張、攻撃性。
- e. ゆっくりと描かれた太い線：器質性の脳障害に時々認め、破局的な反応に近い。
- f. 細い線：臆病、引きこもり、観念化。
- g. 細い線と太い線が混じっている：衝動性と感情不安定性。
(以下の3項目は、代償不全や境界を保持できないことを示している。)
- h. ふわっとした線：強迫の防衛の破綻。
- i. 点線や破線、あるいは
- j. 髭のある線：（線の太さが所々異なる）。iもjも自他の境界の問題を示している。

表2 (つづき)

部分と部分の統合

- a. 統合不良, 非対称, 部分の位置の誤り:
1. 器質疾患。
 2. 行動化。
 3. 描画の他の部分にもよるが, このような部分の位置の誤りは, 認知や人格の発達障害に基づいた衝動性, 不器用, 強調運動不良などを示している。
- b. 関節と関節の間や, 体の部分と部分の間に, 隙間やずれがある: 解離状態の可能性。
- c. 手, 首, 頭が離れている: 解離状態の行動化。
- d. 体の境界が二重: 非現実感, 離人感。
- e. 特に, 手首や首の切傷の線: 破壊行動, 特に自己破壊衝動。
- f. 鋭く, 尖って, 針金のような人物: 敵意の衝動。
- g. まるみをおびた人物: 受け入れられていない敵意。
- h. 手や足がない:
1. 恐慌状態。
 2. 極端な不全感。
 3. 去勢不安。
- i. 大きな手, 棍棒のような腕: 攻撃的な行動化。
- j. 体から外に向かって突出した腕: 外に向けられたエネルギー。
- k. 体の中に向かって描かれた腕: 自分自身に向けられたエネルギー。
- l. 目がない: 否認。
- m. 大きすぎる耳: 過敏。
- n. 大きすぎる目:
1. 警戒。
 2. 覗きの傾向。
 3. 知覚症状 (例えば, てんかんの前兆)。
- o. 奇妙で, 位置の不自然な, 誇張された感覚部: 投影に依存しているか, 過度に警戒している。目が交差しているような絵は, 強迫的な防衛が代償不全に陥っていることを示している。
- p. 単純な線や円で普通は描かれる, 性のはっきりしない, 漠然とした人物画:
1. 情緒的に幼い。
 2. 抑うつ。
 3. 状況依存的な性格。
 4. 体の中心部に点や円でへそや腹のボタンを描く: 他人にしがみつき, 共生的な関係を持つ傾向。
 5. 臍の緒の位置にベルトのバックルをしっかりと描く: 共生的な関係がより複雑で高度に表現されている。
- q. 顔の全要素または両眼の描かれている横顔: 妄想的あるいは倫理的思想が器質的疾患のために障害されている。
- r. 内臓が見えるような人物画: 自我境界や身体境界の障害。
- s. 人物を表わすというよりは象徴的な絵: 過度の象徴的な思考法。

ここで, Richman の評価表においてごくわずかし記載されていないものについて若干補足しておきたい。それは, 「欠如」ないし省略に関するものである。

欠如にはさまざまなものがある。足がないもの、手首から先がないもの、頭部がないもの、顔の輪郭のみで目や鼻や口がないもの、目のなかの瞳がなくて目がぼっかりと虚ろになっているものなど。表3は Koppitz (1968) による身体各部の欠如の意味である。5歳から12歳までの児童の鉛筆による人物画である。Koppitz の行った教示は、<この紙の上に人間を1人、全部かいて下さい。どんな人でもかまいません。ただし、丁寧に書いて下さい。漫画のようになってはいけません>というものであった。

近藤 (1998) は Koppitz とほぼ同様の教示を用いて、小児療育センターを受診した6-14歳のLD児たち (平均年齢8.5歳) に対して人物画を施行しているが、その結果、「LD児の描画には鼻や首・肩といった部分の欠如が多く、5本の指や衣服を描く数が少ないなど、全体的に明細度が低かった」という結果が見いだされたという。

欠如の場合、自殺予告徴候としての「未完成サイン」(石川・大原, 1979; 石川, 1991) にも留意しておく。未完成サインは経時的に描かれた数枚の絵から読みとれる自殺サイン

表3 子どもの人物画における身体各部の欠如の意味 (Koppitz, 1968より要約)

部 位	欠 如 の 意 味
目の欠如	社会的に孤立した子ども。現実世界に直面することを拒否し、空想の世界に逃避。
鼻の欠如	恥ずかしがり。引っ込み思案。無能感。孤立無援感。
口の欠如	恐怖や不安。他者との交際の拒絶。
胴体の欠如	精神発達の遅れ。脳損傷。
腕全体の欠如	攻撃的な子ども。盗癖のある子ども。
足全体の欠如	強い不安。不安定感。自分の足に対する極度の不安。
足首から先の欠如	足場の不安定感の指標。
首の欠如	未成熟。衝動性。内的統制の不全。

の一つであるが (表4を参照)、絵の一部のみが着色されていなかったり、人物の顔がなかったりするもの。要するに、「長時間かけて取り組み、作者の完全癖を偲ばせるような緻密な構成や明細化の部分があり、それなのに一見中途半端で描くのをやめてしまったように見える描画」(石川, 1991)である。未完成サインはうつ病圏内の人に多く見られ、無意識的レベルで自殺行為と相通ずるものであるという (石川, 1980)。

(4) 絵に切り傷がないかどうかに注意する。切り傷はもっぱら赤鉛筆を用いたもので、手首や首などに描かれていたりする。これらの傷はクライアントが有している自殺への志向性を直接的に表現したもので、検査者への絵画的コミュニケーションである。(このような場合検査者としては自殺への志向性をクライアント自身に確認し、自殺計画の有無や自殺の危険度を具体的に吟味・評定することが大切となる。)

(5) HTP法を創始したBuck(1948)は、人物画を被検者の自画像として見た場合、化粧の乱れや身体障害などはしばしばそのまま正確に描き出されるが、その場合、「被検者は通常、描かれた人物を鏡像のような形にしてそれら(筆者注:化粧の乱れや身体障害など)を再現するだろう(The subject will usually reproduce them upon his drawn Person as if the drawn Person were his mirror-image.)」と述べている。これはなかなか大切な点である。筆者自身も、ある中学生女子(手首自傷症候群)に自画像をかいてもらったところ、彼女は右手の手首の内側に赤の色鉛筆で切り傷を入れた。言うまでもな

表4 絵画における自殺サインと思われるもの(石川, 1980)

1. 1枚の絵だけから読みとれるサイン
 - ①具体的に自殺の状況あるいは手段を描いたもの。
 - ②自殺を抽象的に表現したもの(りんごとナイフ、ビルから転落する石、らせん、うずまき、不自然なペンダント)。
 - ③内容が自殺・死の背景と関連したもの(寂しい情景、暗闇、別離、失望、自己嫌悪、他害、孤立、憤怒)。
2. 経時的に描かれた数枚の絵から読みとれるサイン
 - ①形態の不連続—「未完成サイン」(塗り残し部分、目鼻のない顔、首のない人物画など:一種の完成強迫), stick-figureの出現, 自己像の退縮, 樹木画における変化。
 - ②色彩の不連続—「赤と黒」の占める割合の大きい絵。
 - ③描画態度の不連続—絵画セッションへの不参加, 筆勢の低下, 攻撃性のあらわれ(塗り込め, 強いタッチ), 度重なる修正, 作品の破り捨て。

く、彼女が日常実際に自傷していた部位は、左手首の内側であった。また、別の中学生男子（校内暴力）は右利きなのに、自画像では左手に棒状の長い物を持っていた。

(6) 子どもの場合、黒-色彩バウムテストが描けないという子はまずいないが、それに引き続いて施行される自画像が描けないという子は、稀ではあるが存在する。自画像が描けない理由としては、①自己評価がきわめて低いためにセルフイメージを表出することに抵抗がある、②描画能力が低いために小学校のクラスで自分がかいた人物画（例えば、棒人間）をクラスの子どもたちに笑われたという否定的対人経験がある、などが挙げられよう。

自画像テストでは「自分の全身像」を描くように求めるが、いわゆる人物画テストでは「人」を描くように求める。しかし、人物画テストには被検者のセルフイメージが投映されるものとされている。例えば林（1977）は、「人物画に描かれる自己像は、心理的に知覚されたものであることもあれば、無意識的に抑圧された像が投影されることもあり、また生理的な自己についてのイメージ（筆者注：ボディイメージのこと）のこともある」と述べている。自画像テストと人物画テストではいったいどういう相違があるのだろうか。これについては十分に検討していないので何とも言えない。今後の課題である。

引用文献

- 浅原尚子 2001 personal communication.
- Bolander, K. 1977 *Assessing personality through tree drawing*. New York: Basic Books. 高橋依子訳, 1999, 樹木画によるパーソナリティの理解, ナカニシヤ出版.
- Buck, J. H. 1948 The H-T-P technique: A qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology. Monograph supplement No.5*. Vermont: Brandon. 加藤孝正・萩野恒一訳, 1982, HTP 診断法, 新曜社.
- Burns, R. C. & Kaufman, S. H. 1970 *Kinetic Family Drawings (K-F-D): An introduction to understanding children through Kinetic Drawings*. New York: Brunner/Mazel.
- Burns, R. C. & Kaufman, S. H. 1972 *Actions, styles and symbols in Kinetic Family Drawings*. New York: Brunner/Mazel. 加藤孝正・伊倉日出一・久保義和訳, 1975, 子どもの家族画診断, 黎明書房.
- Cox, M. V. 1992 *Children's drawings*. London: Penguin Books. 子安増生訳, 1999, 子どもの絵と心の発達, 有斐閣.
- Denny, J. M. 1972 Techniques for individual and group art therapy. *American Journal of Art Therapy*, 11: 3, 117-134.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-esteem の研究 九州大学教育学部紀要, 18, 53-65.
- Fodor, Von S. und Kendel, K. 1966 Vergleichende Beobachtungen von schwarzen und farbigen Baumzeichnungen bei psychotischen Patienten: Ein Beitrag zur objektiven Untersuchung der Affektivität bei Psychotikern. *Schweizer Archiv für Neurologie, Neurochirurgie und Psychiatrie*, 97, 361-386.
- 藤中隆久 1996 バウムテストにおける人間関係の効果の実証的研究 心理臨床学研究, 14: 2, 163-172.

- 深田尚彦 1958 学童の家族描画 心理学研究, 29: 4, 38-41.
- 原田則代 1998 健常者と精神分裂病群における黒-色彩バウムの比較 未発表資料
- Hammer, E. F. 1967 Recent variations of the projective drawing techniques. In E. F. Hammer (Ed.), *The Clinical Application of Projective Drawings*, second printing, Springfield, Illinois: Charles C Thomas, 391-438.
- 林 勝造 1977 「身体イメージ」と描画—人物画と樹木画を中心として 教育と医学, 25: 6, 40-47.
- 日比裕泰 1994 人物描画法—絵にみる知能と性格 ナカニシヤ出版
- 一谷 彊・津田浩一・山下真理子・村澤孝子 1985 バウムテストの基礎的研究—いわゆる「2枚実施法」の検討 京都教育大学紀要, Ser, A, 67, 17-30.
- 一谷 彊・林 勝造・国吉政一・小林敏子・津田浩一・山下真理子 1986 バウムテストによる生涯発達研究[I]—樹冠と幹の関係指標の発達の傾向と精神的加齢現象の検討 京都教育大学紀要, Ser, A, 69, 53-68.
- 今村初美 1998 色彩バウムと発達段階との関連性 平成9年度熊本大学教育学部心理学科卒業論文
- 井上洋一・水田一郎 1998 一単純型分裂病症例の描画にみる分裂病性自閉の精神病理学的研究 精神神経学雑誌, 100: 6, 398-411.
- 入江是清 1986 非行少年の自画像と家族画—横浜浮浪者襲撃事件の少年たち 家族画研究会編, 臨床描画研究 I, 金剛出版, 150-168.
- 石川 元 1980 自殺の表現病理 精神神経学雑誌, 82:12, 792-802.
- 石川 元 1985 雨中人物画法 Draw-A-Person-in-the-Rain-Test こころの臨床ア・ラ・カルト, 11, 43-49.
- 石川 元 1991 描画テストにおける「自殺サイン」の使い方 日本描画テスト・描画療学会編, 臨床描画研究VI, 金剛出版, 121-142.
- 石川 元・大原健士郎 1979 絵画における「未完成サイン」と希死念慮 臨床精神医学, 8: 6, 81-92.
- 岩井 寛 (編著) 1981 描画による心の診断—子どもの正常と異常をみるために 日本文化科学社
- Kanner, L. 1957 *Child psychiatry. 3rd ed.* Springfield, Illinois: Charles C Thomas.
- 黒丸正四郎・牧田清志訳, 1964, 児童精神医学, 医学書院.
- 加藤孝正 1986 動的家族画 (KFD) 家族画研究会編, 臨床描画研究 I, 金剛出版, 87-104.
- 岸本寛史 2002 バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群 心理臨床学研究, 20: 1, 1-11.
- Knoff, H. M. & Prout, H. T. 1985 *Kinetic drawing system for family and school: A handbook.* Los Angeles: Western Psychological Services. 加藤孝正・神戸 誠訳, 2000, 学校画・家族画ハンドブック, 金剛出版.
- Koch, C. 1952 *The Tree Test: The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis.* Bern: Hans Huber. 林 勝造・国吉政一・一谷 彊訳, 1970, バウム・テスト—樹木画による人格診断法, 日本文化科学社.
- Koch, R. 1980 学校不適応児の男児 Regula Koch・林 勝造・国吉政一・一谷 彊編著, バウム・テスト事例解釈法, 日本文化科学社, 2-7.

- 近藤智栄実 1998 LD およびその周辺の子どもの人物画 日本描画テスト・描画療学会編, 臨床描画研究XIII, 金剛出版, 57-70.
- Koppitz, E. M. 1968 *Psychological evaluation of children's human figure drawings*. New York: Grune & Stratton. 古賀行義監修, 甲斐直義・園田富雄・村瀬隼男・丸山和夫・尾花英輔・繁永芳已訳, 1971, 子どもの人物画, 建帛社.
- 国吉政一 1970 補遺 日本におけるバウム・テストの研究 林 勝造・国吉政一・一谷 彊訳, バウム・テスト—樹木画による人格診断法, 日本文化科学社, 111-150.
- 増田勝幸・名島潤慈 1975 色彩バウムに関する研究—正常者と分裂病者の比較 広島医学, 28: 8, 128-129.
- 水口公信 2002 最期の樹木画—ホスピスケアにおける絵画療法 三輪書店
- 森谷寛之 1989 イメージ調査法としての九分割統合絵画法—大学生の「自己イメージ」について 家族画研究会編, 臨床描画研究II, 金剛出版, 154-167.
- 森谷寛之 1990 九分割統合絵画法と青年期の自画像の発達過程 大東祥孝・松本雅彦・新宮一成・山中康裕編, 青年期 美と苦悩, 金剛出版, 229-242.
- 村田敏晴・村田陽子・名島潤慈 2001 黒色バウムと色彩バウムの比較: 描画の順序効果とバウム内容の検討 山口大学心理臨床研究, 1, 23-27.
- 村田陽子 2002 セルフ・エスティームと黒-色彩バウムテストとの関連性 山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専修修士論文
- Murayama, K. 2001 Female art students' images drawn in Kinetic Self-Image drawings. *Japanese Bulletin of Arts Therapy*, 32: 2, 34-41.
- 長坂陽雄 1981 幼児画の発達過程における「頭足人」の位置づけについて 大妻女子大学家政学部紀要, 17, 91-109.
- 名島潤慈 1996 黒-色彩バウム二枚法の意義 熊本大学教育学部紀要, 45, 人文科学, 271-281.
- 名島潤慈 1998 色彩バウムテストと抑うつ状態との関連性 熊本大学教育実践研究, 15, 1-5.
- 名島潤慈 1999 黒-色彩バウムテストの解釈 熊本大学教育実践研究, 16, 61-65.
- 名島潤慈 2000 心理アセスメント 鑪幹八郎・名島潤慈編著, 新版 心理臨床家の手引, 誠信書房, 31-67.
- 名島潤慈 2002 ひすい技法—波のイメージを用いたリラクセーション 山口大学教育学部研究論叢, 52, 第3部, 45-62.
- 名島潤慈・増田勝幸・増田徳幸・増田文枝 1974 色彩 Baumtest に関する研究(1) ロールシャッハ・テストとの関連性 第25回中国四国精神神経学会発表資料
- 名島潤慈・増田勝幸 1993 バウム・テスト 上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック, 西村書店, 223-238.
- 名島潤慈・原田則代・横田周三・森田裕司・増田勝幸・植村孝子 2001 バウムテスト 上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック 第2版, 西村書店, 186-197.
- 中尾舜一・吉川公雄 1974 バウムテストの人間生態学的研究1—医学部進学課程学生の調査から 久留米大学論叢, 23: 2, 89-129.
- Regula Koch・林 勝造・国吉政一・一谷 彊編著 1980 バウム・テスト事例解釈法 日本文化科学社

- Reznikoff, M. & Reznikoff, H. R. 1956 The family drawing test: A comparative study of children's drawings. *Journal of Clinical Psychology*, 12, 167-169.
- Richman, J. 1986 Family therapy for suicidal people. New York: Springer. 高橋祥友訳, 1993, 自殺と家族, 金剛出版.
- 酒木 保 1999 色枠付け法とイメージ療法的視点—特に家族との関係から 藤原勝紀編, 現代のエスプリ387 イメージ療法, 至文堂, 182-188.
- 桜井茂男 1984 幼児における人物画の大きさと有能感および体格の関係—枠づけ法を用いて 教育心理学研究, 32: 3, 54-59.
- 桜井茂男・杉原一昭 1986 児童における人物画の大きさと有能感およびホープレスネスとの関係—枠づけ法を用いて 筑波大学心理学研究, 8, 73-79.
- 澤柳志津江・石川 元・川口浩司・大原健士郎 1989 「雨中人物画」にあらわれた森田療法の治療過程 臨床精神医学, 18: 1, 81-89.
- 空井健三・清藤理恵 2001 人物画からみた青年の変化 発達, 86, 57-70.
- 杉野健二 1995 アルコール依存症の内観療法前後の「雨中人物画」の変化 日本描画テスト・描画療法学会編, 臨床描画研究X, 金剛出版, 169-183.
- 高江洲義英 1975 慢性分裂病者の人物画と「間合い」 芸術療法, 6, 15-21.
- 坪崎仁美 2003 personal communication.
- 牛島定信・佐藤美丸 1973 精神分裂病患者の自己像—予備的研究 精神医学, 15: 1, 39-47.
- 山形恭子 1989 なぐり描きと人物画の誕生 発達, 38, 19-30.
- 山中康裕 1976 精神分裂病におけるバウムテストの研究 心理測定ジャーナル, 12: 4, 18-23.
- 山中康裕 1978 思春期内閉 Juvenile Seclusion —治療実践よりみた内閉神経症（いわゆる学校恐怖症）の精神病理 中井久夫・山中康裕編, 思春期の精神病理と治療, 岩崎学術出版社, 17-62.
- 山中康裕 1995 箱庭療法の適応と禁忌 精神科治療学, 10: 6, 627-630.
- 山中康裕 1999 芸術・箱庭療法 氏原 寛・成田善弘編, 臨床心理学1 カウンセリングと心理療法—心理治療, 培風館, 134-151.
- 山中康裕 2003 こころと精神のはざままで 2 バウムテスト論考 臨床心理学, 3: 2, 239-245.
- 山下真理子 1982 バウムテストの発達的研究—樹冠と幹の発達の傾向および空間関係の描写について 教育心理学研究, 30: 4, 287-292.
- 山内洋三 1973 分裂病者のセルフポートレートについて 臨床精神医学, 2: 2, 119-126.